

## 1. 緒言

平成7年1月17日未明に発生した阪神大震災は死者5、400人を越え、戦後最大の惨事となった。これに対応して、慶應義塾は医学部を中心に「阪神大震災救援・慶應義塾大学医療チーム」を結成し、2月1日より1ヶ月間にわたり被災地における救援医療活動を実施した。この医療チームの派遣は本塾にとっても初めてのことであったが、塾内外の多大な支援により有益な業務を遂行するこゝろができた。本報告書は、大震災発生より医療チーム派遣にいたるまでの経緯、救援医療活動状況を記録に留め報告すべく、将来の有事に備える資料の一部とすることを目的とした。

## 2. 救援医療チーム結成の経緯

平成7年1月17日（火曜日）午前5時46分、兵庫県南部を中心に発生した地震は、その発生時に帯が未明であつたことあり、東京では朝の二ユーに帯が崩れを初め知った人が多かつた。高速道路の崩壊をともなう直下型大地震とは報道されていたものの、当初の報道では死亡数は200名を越える程度とされ、しかし、経過とともなつたり。当日午後には、死傷者数、負傷者数はうなぎ登りに増加し、次第に大災害の全貌が明らかとなつた。当日午後には「兵庫県南部地震」と命名された。

翌18日にいたり、この地震が戦後では最大規模の被災者を生んだ大災害であることが判明した。しかし、詳しい情報、特に救急医療対応状況に関しては殆ど報道されず、ただ建物が崩壊した病院の存在が報道されたに過ぎなかった。

本塾医学部は情報の収集につとめ、救急部は翌19日、日本救急医学会宛（日本医科大学・山本保博教授）に被

部 急に派遣した。と  
救地整備が伝え  
に、現時をランテ  
共、随時をポラ  
とを体制からの申  
する昌勤務から、涼子君（産婦人科・北村  
達昌君）を伴うといと涼子君、放射線科  
伝木君、これに協力した園正裕君、  
を鈴木君、これに協力した園正裕君、  
旨を鈴木君、これに協力した園正裕君、  
する鈴木君、これに協力した園正裕君、  
る鈴木君、これに協力した園正裕君、  
協力させ、これに協力した園正裕君、  
に熊清さ、これに協力した園正裕君、  
療に熊清さ、これに協力した園正裕君、  
医（田熊清さ、これに協力した園正裕君、  
援2名（田熊清さ、これに協力した園正裕君、  
救2名（田熊清さ、これに協力した園正裕君、  
の医2名（田熊清さ、これに協力した園正裕君、  
地任出来る被災者に含まれ、被災地を統括して活動する  
災専遣さらし開業幸大害日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
正幸大害日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
幸大害日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
大害日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
害日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
日大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
大急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
急アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
アある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
ある同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
同この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
この被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
被災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
災した神戸活動に神戸生石を内00東全  
災した神戸活動に神戸生石を内00東全

れた。

上記救援活動に関する現地からの情報に対応し、医学部は救援医療チーム派遣の計画を進めていた。平成7年1月25日付、神戸市衛生局長より発信された救護支援要請（神東保第981号）に対応し、同日開催された緊急会議（植村常任理事、細田医学部長、矢部病院長等）において、慶應義塾として正式に救援医療を実施することとを決定し、さらに本塾予算措置を得て「阪神大震災救援・慶應義塾大学医療チーム」（同本部長相川直樹救急部教授）が組織された。医療チームの構成は1チームを医師3名、看護婦3名とし、活動期間は2月1日より2月28日までの予定とした。

### 3. 派遣準備

医療チーム派遣の決定にともない、諸準備が迅速に進められた。

医療チームの本部は医学部救急部内に置かれ、救急部助教授・堀進悟君を副本部長とした。さらに支援事務に関し、医学部庶務課（播磨時一課長）が全般の支援業務を統括した。医療チーム派遣は塾内では業務命令により遂行され、その予算措置がとられ、医療チームには地震特約を含めた各種損害保険等が適用されるように配慮された。また、超重症患者が発生した場合の受け入れ体制として、大阪府立千里救命救急センター（太田宗夫所長）が後方三次施設として確保された。医療チーム派遣に際しては、正確な情報把握が必須であったが、この頃より、発信日、発信場所により、現地情報の詳細が刻々変化する状況となり、被災地の状況が急速に変化している様子が伺われた。医療チーム派遣にともなう情報収集と被災地受け入れ先との連絡のため、1月27日早朝より堀副本部長が現地の調査に向かった。同日には、既に阪神電鉄青木駅まで交通が回復し、青木駅より徒歩約20分で東灘保健所に到着することが可能であった。堀副本部長は石井保健

所長、本田保健課長、石原京介医師と会談し、医療チーム派遣に関する慶應義塾の意志を伝えるとともに、救援業務遂行に必要な以下の諸点を確認した。

1) 慶應義塾大学のボランティア活動として2月1日より1ヶ月の予定で、医師3名、看護婦3名からなる医療チームを派遣する。この活動は慶應義塾の業務として遂行される。

2) 救援医療の対象を東灘区に集中する。

3) 同区の医療復旧計画に組織的に協力するために、同医療チームの活動を東灘区保健所の管轄下(医療統括責任者・石原京介医師)に置く。

上記に対し、石原医師より東灘区役所管轄下に32の避難所に救護所が設営され、救護所医療が行われていることが説明され、慶應義塾大学は住吉中学校および御影北小学校の避難所内救護所の医療を担当することが依頼された。

被災地内の医療の統括方法として、各救護所よりFAXにより不足備品・薬剤の連絡と業務報告が適宜行われていくこと、および各救護所を担当する医療チームが3-4日毎に区役所に集合し、「常設救護所連絡会」をもっていることが説明された。

現地では道路状況の回復にともない、すでに救急車が稼働し、入院治療を必要とする患者が避難所で発生した。稼働には病院への転送が可能であることが確認された。これにより原則として、大阪府立千里救命救急センターまで患者を搬送しない方針とした。また、各地より救援物資として多量の医薬品が区役所に搬入、貯蔵され、必要に応じてボランティアが救護所に搬送すること、薬剤の管理は区役所で薬剤師のボランティアが行っているが、細かい区分けは出来ていないことなどが明らかとなった。この時点では東灘区内で約100カ所の医療機関が診療を再開していたが、残りの施設の診療再開の目途はたっていないことであった。

掘副本部長は直ちに住吉中学校と御影北小学校に向い、現地避難所および周囲の状況と医療内容を視察した。住吉中学校には被災者約700名、御影北小学校には約4

00名の被災者が収容されてきた（添付資料2参照）。住吉中学校には土肥医師と個人ボランティア救護所として利用して各1名が医療支援活動中であり、平均約50名であった。診療の内容は風邪、高血圧、喘息、皮膚炎、軽症外傷など、プライマリケアが主体であることが判明した。診療には簡便なカールテを使用し、カルテ保管は患者渡しライフラインの電氣のみ復旧され、生活用水は制限された。食料はパンなどが夜間に被災者は教室で、毛布だけで寒さを凌いでいた。御影、北小学校では、京都音羽会病院の医師1名、看護婦3名が活動中であつたが、受診者数などの一地方、東京では同日夕刻に本塾医学部北里講堂においで現地医療状況を報告員と堀副部長から、報道で紹介され。従事者、に急遽帰京の惨状と救済の要請が、小児科、看護部、看護婦派遣矢部病院長より、割愛が要請され、看護部、看護婦派遣が指示され、2月1日の派遣に向け、派遣者リストは滞り無く作成された（添付資料3参照）。し、本の部を中心に詳細な検討が行われ、携帯備品及び薬品の供給状況、救護所における緊急時の対応、さらには搬送可能重量などの諸要素を考慮して検討された。日本光電株式会社より携帯用心電計が貸与された。備品と薬品の調達現地で薬品、備品の不足があれば、現地からの電話およびFAXの連絡により適宜補充する方針とし、携帯電話を1台準備した。その他ストーブ、簡易ベッド、電子レンジなどの生活備品を現地調達し、さらに派遣人数分の防寒具と二次災害に備えてヘルメットを準備した。慶應義

塾の認識票として、医療チームは白衣の上に三色の腕章を巻くこととなった。カルテには、すでに被災地で使用されている簡便な形式（添付資料5参照）を採用することとした。

医療チームの最年長医師をチームリーダーとし、現地での活動全般の統括と業務報告を義務づけた。業務報告は毎日の受診者数をFAXにより翌日に本部に送付することとし、不足備品・薬剤の連絡も行うこととした。さらに住吉中学校と御影北小学校のそれぞれに業務日誌を用意し、チームリーダーは帰京後に報告書を提出することとした。

医療チーム参加者には、添付資料（1）～（4）が渡され、今回の救援医療の意義と、塾員としてのチームワーク、および二次災害への心得について本部より説明・注意された。第1班には相川本部長が同行し現地入りすることとなった。

#### 4. 被災地における医療活動

##### 1) 救援医療活動の開始

医療チーム第1班は2月1日未明に東京駅を立ち、新幹線と阪神電鉄を乗継いで青木駅から東灘区に入り、東灘区保健所に活動開始報告のため立ち寄り、同日午後よ業務を開始した。済生会神奈川県病院（佐々木淳一君救急部68回生）のチームから住吉中学校および御影北小学校の保健室を救護所として引き継ぎ、心電計、血糖測定器その他の医薬品を設置して救護所の整備し、早速診療が開始された。

##### 2) 傷病の内容、受診患者数、診療時間など

避難所では地震発生直後に多かった外傷患者は減少し、感冒、呼吸器疾患、高血圧、腰痛、皮膚疾患などが主要疾患となっていた。被災し入院した地域の医療機関でもチームの役目となった。全体に軽症患者が多かったが、受



4) 業務連絡、患者数の推移

本部への業務連絡は本部あてFAXにより毎日送付され、診療患者数、不足医薬品などが適宜連絡された。受診患者数は避難所生活者数の減少と地元医療機関の業務再開にともない、わずかずつ漸減の傾向を示した(添付資料9参照)。

5) 塾内外からの支援

避難所を救済医療の活動拠点とし得たために、全国各地からの医療ボランティア(眼科、耳鼻科、歯科医師、心理療法士など)の協力が得られ、よりレベルの高い救済医療活動を行うことができた。2月16日以降、本塾医学部精神科(浅井昌弘教授)の医師が淡路島への救済医療の途中から東灘区へも立ち寄り、専門的な診療支援をいただくことができた。

2月15日には本塾の長島昭常任理事が渡部淳総合企画面室主任とともに避難所を視察、激励をいただいた。さらには、塾内外の多くの方々から現地医療チームへ激励や陣中お見舞いをいただいた。

特筆すべきことは、連合三田会(服部禮次郎会長)がこの活動を強力に支援して下さったことである。服部会長は2月9日に相川本部長を訪れ、その報告を聞いたり、急遽支援を検討され、医療チームの活動資金として50万0千円のご寄付を慶應義塾に下さった。また、パレスホテル様より100万円を医学部にご寄付頂いた。

6) 中間報告検討会議

2月16日に矢部病院長臨席のもとに中間報告検討会議が本部で行われ、業務が順調に遂行されていることの確認と共に、その後の予定が協議された。受診患者数の推移、被災地の復旧状況などを綿密慎重に検討した結果、救済医療チームの活動は当初の予定通り2月末で終了することが決定された。

7) 撤収準備

上記中間報告検討会の決定を踏まえ、撤収準備のため

救急部篠澤洋太郎専任講師が本部部長代理とし2月21日  
日に現地に面談し、2月4日より2月8日の巡回診療に、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解  
た。同時に、高等学チムは被災者へ、2月8日の巡回診療に、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解  
灘高等学チムは被災者へ、2月8日の巡回診療に、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解  
救護所へ渡す。御影北小、北小、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解  
がた。御影北小、北小、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解  
吉中学校、御影北小、北小、東灘区保健所の本所の方針を伝へ、課長と解

#### 8) 救援医療活動の終了

2月27日より相川本部長が現地に入り、住吉中学校  
と御影北小の校長とにそれぞれ面談、2月28日撤  
収の意向を伝え、巡回し撤収を伝え、続いて石井保  
等学校の避難所を巡回し撤収を伝え、続いて石井保  
長と本田保健課長とに面談し撤収を伝え、続いて石井保  
石井保健所長と本田保健課長からは、慶應義塾に対  
て深甚な感謝の意が述べられた。  
さらに、相川本部長は大阪に戻り、大阪府立千里救命  
救急センター太田所長に後方支援待機に関するお礼を述

べた。  
同日、午後6時より東灘保健所において「第12回常  
設救護所連絡会(最終回)」が開催された。この会議に行  
て3月以降は救護所医療を地元医師会の診療体制に移  
させたことが確認され、撤収が円滑に行われることとな  
った。

医療チームは28日早朝より撤収作業を行い、午後  
両救護所を閉鎖、現地を出発して夜半に帰京した。

#### 9) 経理報告

本救援医療活動に対しては、当初、慶應義塾より1、  
000万円の予算措置を頂いた。  
活動に要した経費総額は、6、449、584円であ  
り、その内訳は添付資料11に示した。

## 5. 総括

を・いてるまで、強た売。たみ会。と第  
 療お了るまの婦読。れの機。来解次  
 医に終た活看護はまと学出た  
 所区にいたの、一部れみこをもい  
 護灘事に回師の、げにた味と深  
 救東無了今医動あ害し意こて感  
 災市つ終、た活り災提療のくしく  
 震戸か務し、し療と大提療聞対厚  
 大神益業貫し、医ものを医をに  
 阪神は有り一参加医も有療り懐動位  
 「ム」をよは一に参ので曾医よ述活各  
 まで、これ前体制ム、照未な者の本係  
 まチ、結成体一で、参、要災者、関  
 日療し、ム支援チ固2は必被災者、関  
 8医行一な医は料活動に参た  
 2援迷チ力。強た。ク資療対「一に頂  
 り救を。強た。ク資療対「一に頂  
 よ学動たの。つワ添援者「と終支  
 日大活きならなム（救災者と終支  
 1塾療でかとな紙上の被ま」を  
 1義医が外盤チ紙回のどた告なる。  
 2月義医が外盤チ紙回のどた告なる。  
 慶應救こ塾いち新多にを絶大  
 慶應救こ塾いち新多にを絶大